2025年5月18日　説教「ヤイロの娘の霊が戻り」

ルカの福音書8章49～56節

会堂管理者ヤイロからの要請で、瀕死である娘の所に向かう途上で、長血を患う女はイエスの着物のふさにさわっていやされ、その信仰によって救われました。そして、ヤイロの娘はどうなったでしょうか。

１．娘の死を知らされた父（49～50）

①娘の死の連絡（49**「イエスがまだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人が来て言った。『あなたのお嬢さんがなくなりました。もう、先生を煩わすことはありません』。」**

イエスが話しをされている時に、会堂管理者ヤイロの家の者がやってきました。そして、告げたのでした。「あなたのお嬢さんはなくなりました」と。なんということでしょう。12歳と言えば、イスラエルでは大人の入口ですが、実際にはまだ子どもの域を越えてはいません。ヤイロにとってはひとり娘でありました（42 節）。何の病気であったかは記されてありませんが、彼女は命をおとしたのです。使いの者は言いました。「もう、先生を煩わす必要はありません」。死んだ今となっては、来てもらってもどうにもならないという言い方です。ヤイロも気を落としたことでありましょう。

②ただ信じなさい（50）**「これを聞いて、イエスは答えられた。『恐れないで、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります』。」**

ところがイエスは言われます。『恐れないで、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります』。この期に及んでと思った人もいたかもしれません。しかし、イエスは静かで確かな口調で、恐れずに信仰を持って、前を向きなさい言われたのです。そうすれば娘は直る、とまで告げられたのです。つまり、絶望するヤイロに向かって、今こそいのちの造り主を覚えることを教えられたのです。

２．眠っているのです（51～53）

①家に入られたイエス（51）**「イエスは家に入られたが、ペテロとヨハネとヤコブ、それに子どもの父と母のほかは、だれもいっしょに入ることをお許しにならなかった。」**

マルコの福音書では、ヤイロの家に向かうのを、ペテロとヨハネとヤコブだけに許したとあります。そして、家に着いてからは、父と母、自分の供の者、すなわち上記の三人の弟子達だけを中に入れたとあります。この三人については、後に高い山において、イエスが姿変りをされた時にも同行を許されています（マタイ 17 章）。ここでは、両親と、三人の弟子以外は一緒に入ることをお許しにならなかったとあるように、強い規制をかけられています。

②泣かなくてもよい（52）**「人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。『泣かなくてもよい。死んだのではない。眠っているのです。』」**

娘の死により、周囲の者たちは泣いていました。これを泣き女たちが来ているのだという見方はともかくとして、誰よりも一人娘を失ったヤイロ夫

妻の悲しみは大きかったことでしょう。しかし、そんななかでも、イエスは夫妻に言われるのです。「泣かなくても良い。彼女は死んだのではない。眠っているのです」と。イエスは、娘が生き返ることを、示唆されているのです。

③イエスをあざ笑う人々（53）**「人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざわらっていた。」**

しかし、人々は娘が息を引き取り、心臓も動いていないということからでしょうか、死んだと認めていました。そして、そのことのゆえに、イエスの言葉を聞きながら、イエスをあざ笑ったのです。旧約時代のエリヤの出来事なども忘れて、イエスのお言葉を

３．娘の回復と良心の驚き（**54～56 節**）

①娘の手を取り（54）**「しかしイエスは、娘の手を取って、叫んで言われた。『子どもよ。起きなさい。』」**

イエスは、娘の手を取って言われました。「子ども。起きなさい。」マルコの福音書ではこの言葉を「タリタ・クミ」というアラム語をそのまま記しています。とても印象的であったのでしょう。それを、ルカは「叫んで言われた」と記して、強い印象を表現しています。

②娘は起き上がり（55）**「すると、娘の霊が戻って、娘はただちに起き上がった。それでイエスは、娘に食事をさせるように言いつけられた。」**

イエスのお言葉の直後、「娘の霊は戻った」とあります。娘は肉体の面はもちろん、神の恵みの霊をいただいて回復を与えられたのです。彼女はすぐに立ち上がりました。生き返った彼女に対して、イエスはその肉体のことを配慮され、食事を与えるようにと言われたのです。それは、まさに食事をとる健康が戻ったことをも意味していました。

③誰も話さないように（56）**「両親はひどく驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。」**

娘の命が回復したことを、目の前で見たヤイロとその妻は、ひどく驚いたとあります。イエス・キリストなら何とかしてくださるに相違ないと思ったから、頼みに行ったのですが、その現実になってみると、その御力にただ驚くしかなかったのです。しかしなんといっても、彼らは同時に涙を流しながら喜んだことでしょう。この後、イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと命じられました。イエスは福音のことばが広がることを望んでおられましたが、奇跡的御業だけが独り歩きすることを望んでおられなかたのです。しかし、その噂はその地方全体に広まったとマタイは記しています。

《結論》　今朝もこの聖書箇所から三つのポイントで考えます。「

第一は、ヤイロの信仰についてです。

ヤイロは会堂管理者でありました。ユダヤ教会堂（シナゴーグ）の管理もさることながら、礼拝進行などの責任も持つ立場でした。その彼がイエス・キリストのところに来るのにはそれ相当の理由がありました。というのも、彼の一人娘が死にそうになるという事態に陥ったのです。そこに、イエス・キリストの存在を知り、ヤイロは自らの立場も顧みずにイエスのところにやって来たのです。ユダヤ人は、こうした行動を自らの立場をわきまえていないと批判したでしょう。しかし、彼は自分の立場やそれに伴うプライドなどを捨てでも、自分の娘の命を救いたかったのです。彼にイエスへの信仰があったわけではありません。しかし、イエスに希望をいだいていたことは確かでありましょう。求める思い、門をたたく心といっても良いでしょう。それを主イエスは受けとめてくださいました。そして、今朝の聖書箇所でイエスは彼に信仰を促しています。娘が死んだという知らせにも、「恐れないで、信じなさい」。イエスを癒し主、救い主と信ずる信仰を教えておられるのです。ここに、彼は恵みのうちに入れられていく様子があります。主イエスはこのようにして、人々を信仰へと導いてくださるのです。主はあなたを促しておられませんか。

第二に、ヤイロの娘の霊が戻ったという点についてです。

イエスのお言葉の直後、「娘の霊は戻った」とあります。これはルカだけが記しています。医者として、人間が肉体だけの存在ではなく、そのうちに霊が宿ってこそ生きているということを示そうとしたのでしょう。第一テサロニケ５章 23 節に「あなたがたの霊、たましい、からだが完全に守られますように」とあります。娘は肉体の面はもちろん、霊においても、その魂においても神の恵みの霊をいただいて回復を与えられたのです。彼女はすぐに立ち上がって歩き始めました（マルコの福音書）。生き返った彼女に対して、イエスはその肉体のことを配慮され、食事を与えるようにと言われています。神はわれわれの肉体と霊と魂の健康に関心を持ってくださっています。主はあなたの肉体、霊性、魂が守られること、いやされることを願っておられます。

第三に、私たちが命の恵みと復活信仰についてです。

ヤイロの娘が生き返ったという記事は、福音書の二つの出来事を思い出させます。一つはルカの福音書の 7 章 11 節以下に出て来たナインという町のやもめの一人息子の弔いに遭遇したイエスが、棺に手をおいて起き上がらせたという出来事、もう一つはヨハネの福音書 11 章の、葬られていたラザロを蘇生させたという出来事です。ある人はこのように考えるかもしれません。キリストの復活は信じられても、死者の生き返りは信じられないと。しかし、使徒パウロはこう述べます。「ところで、キリストは死者の中から復活されたと宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものとなるのです。」（Ｉコリント 15;12～14）。死者の復活の出来事を信じることなく、キリストの復活を信じることには無理があるのです。逆にキリストの復活を信じるなら、死者の復活の出来事も受け入れていくべきでありましょう。元々、このいのちは主が与えてくださいました。命は恵みなのです。恵みの主は命の復活をも与えてくださるのです。今朝、もう一度、いのちの恵みを確認し、いのちの主をあがめていきましょう。